

# 加藤 斌『商家必用』に関する一考察

片岡 泰彦

## I はじめに

日本会計史上、明治6年(1873年)という年は、極めて重要な意義を有する。なぜなら、福沢諭吉の『帳合之法』及びアラン・シャンドの『銀行簿記精法』が出版されたからである。しかし、この2冊の有名な簿記文献と並んで、もう1冊の注目すべき簿記書の存在を我々は忘れてはならない。

この簿記書こそ、江戸時代に橋本左内に師事し、封建制に反対し、明治時代の始まりとともに活躍した加藤<sup>なかば</sup>斌が執筆した『商家必用』である。

加藤 斌は、明治6年(1873年)10月と明治10年(1877年)4月に『商家必用』を、新人社から翻訳・出版した。この『商家必用』の原典は、W. Inglis 著の *Book-Keeping by Single and Double entry, London and Edinburgh, 1872年*<sup>1)</sup>である。

明治6年版の初篇は、2冊からなる。第1冊目の初篇上、記簿法は、32葉からなり<sup>2)</sup>、序文と単式簿記の基本的な解説が示されている。

第2冊目の初篇下の記簿教則、<sup>ヒトヘトメ</sup>単認之部は、67葉からなり、単式簿記に関する解説と例題が示されている。

明治10年出版の記簿教則は、3冊からなる。第1冊目の二篇上<sup>カサ子トメ</sup>の複認之部は、45葉からなり、主として複式簿記に関する理論的解説がなされる。

第2冊目の二篇下の複認之部は、63葉からなり、主として複式簿記による例題が示されている。

第3冊目の記簿教則附録全は、24葉からなり、簿記の付録(Appendix)の翻訳である。

次に全5巻の概要を図示する。

1) 筆者の所有する原書は、*Book-Keeping by Single and Double entry, London and Edinburgh* の1881年版と1886年版である。内容は2冊ともまったく同じである。

2) 葉=加藤 斌は、2頁を一葉として採用している。

## (商家必用 概略図)

商家必用				
巻数	年月	内容	現代語 内容	葉数
第一巻	明治六年 十月	初篇上 記簿法	単式簿記	32葉
第二巻	明治六年 十月	初篇下 記簿教則 単認之部	単式簿記	67葉
第三巻	明治十年 四月	二編上 記簿教則 複認	複式簿記	45葉
第四巻	明治十年 四月	二編下 記簿教則 複認之部	複式簿記	63葉
第五巻	明治十年 四月	附録 記簿教則 全	付録 商業上の用語と 取引の解説	24葉

## II 加藤 斌の経歴

加藤 斌の経歴については、故西川孝治郎氏の文献に詳しく論じられている。したがって、西川氏の文献に依拠し解説しておく(1)。

加藤 斌は、越前福井藩士・溝口郷右衛門の息子として、弘化元年(1844年)2月29日に生誕した。幼名は辰五郎と称し、長じて加藤家の養子となる。幼くして、漢籍を学び12、3歳で藩の明道館に入り、そこで幕末の志士橋本左内につき、オランダ語を学んだという。斌という名は、橋本左内がつけたもので、「文武相半ばす」という意味である。

加藤は、若年の時から橋本左内の影響を強く受け、開国進取の精神を深く持つに至る。

橋本左内(1834~1859年)は、幕末の蘭学者・医師の緒方洪庵(1810~1863年)に師事し、医学と蘭学を学び、藤田東湖(1806~1855年)や佐久間象山(1811~1864年)らと親交を持ち、積極的に開国進取の精神を主張した。そして將軍の継嗣問題では一橋派に加わり、藩主松平慶永<sup>よしなが</sup>の待読兼御用掛となり、公の内外の計画に参加し、大いに奔走した。この左内の行動に、加藤も同行し、師左内のため働いたのである。

通商条約をめぐる朝廷と幕府の対立、將軍継嗣問題をめぐる大名間の対立という大問題を解決するため、南紀派の彦根藩主井伊直弼が大老となった。そして日米修好通商条約に調印し、一橋派を押し切って徳川慶福<sup>よしとみ</sup>を將軍に定めた。さらに井伊は、一橋派を弾圧し、公家や大名とその家臣達を多数処罰した。安政5年10月22日の夜には、常盤橋藩邸内の左内の宿舎の取調べがあり、14歳の加藤も尋問を受けたのである。やがて安政6年(1859年)の安政の大獄で、橋本左内は、吉田松陰、梅田雲浜<sup>うんぴん</sup>等とともに処刑された。その後、加藤は故郷に帰り、窮理学(=西洋物

理学)、暦学、数学等を学び、明道館の詩文、算術の教授となった。元治元年には、20歳で長州征伐の軍に加わったと言われる。明治維新以後、斌は横浜へ行き外人と親しく接し、英語や貿易・為替業務を学ぶのである。

その後工部省に入り、明治6年には工務省七等出仕、会計局権長、7年2月には工学寮七等出仕、8年6月には同権助となっている。加藤は、工部省勤務の時間を割いて、イギリス簿記書の翻訳・出版を決意する。そして、私費をもって『商家必用』を出版したのである。工部省を辞した後、海軍省一等属となり、海上法律の制定に関与し、『独逸海上保険法』(1879年)を出版した。官を退いた後、横浜正金銀行、東京製絨会社他等の事業に関係した。大正3年9月4日に死去。享年72歳であった。

加藤が、なぜ並並ならぬ情熱を持って、この簿記書を翻訳し、私費をもって出版したのか、その理由については自ら明らかにしていない。ただ本の冒頭に、三人の名士の序文が見られる。越前藩主の松平慶永(号は春獄)、水野行敏(内務小技監)そして小田切盛徳(司法大録)の三名である。この三人は、それぞれ西洋の記簿法を知っており、商家にとって必要欠くべからざるものであり、商家の利益になるのみならず、国家富強の基礎となるものと確信している。多分、加藤も序文の内容と同様にヨーロッパ的近代文明の一手段として西洋の簿記法をとらえ、この手段によって商業の向上を計らんとしたものと思われる。

---

1) 西川孝治郎『文献例題 日本簿記学生成史』雄松堂書店、昭和57年6月1日、35-48頁を参照した。

### Ⅲ 『商家必用』の構造

#### 1. <sup>ヒトヘトメ</sup>単認之部の解説

第1冊目の初篇上の記簿法は、序文の後、簿記上の組織を理解する上で、ぜひとも理解しておかねばならない重要な用語の解説がなされている。

第一の財本(stock)は、品物、倉庫、器械、船、その他何にても商方に用ふる物を、この中に入れるべしとしている。

第二の借債(Accounts)は、現代語の「勘定」の意味であるが、他方へ算入すべきものを、この中に入る可しと説明している。

第三の手形(Bills)と第四の現金(Cash)については、原文では説明があるが、簡単すぎるので、加藤は訳を省略してしまっている。次に、各帳簿についての解説が詳細になされている。懸賣帳(Day-Book)、懸買帳(Invoice-Book)、現金帳(Cash-Book)、手形帳(Bill-Book)、仕切帳(Ledger)、勘定帳(Account-Book)、財本帳(Stock-Book)、倉庫帳(Warehouse-Book)そして中仕切帳(Journal)等の諸帳簿である。

懸賣帳は、「代金を受取らずして、證書を取(り)て賣たる品物の勘定を日々認るものなり」

と解説している。現代における商品の掛売帳に当たる。原文では Day-Book とあるので、直訳すれば日記帳であるが、説明文では「信用で売上げた商品 (Goods sold on credit) のため」とあるので、懸賣帳という訳は正確である。

懸買帳は、「代金を拂はず、証書を以って買たる品を認むるものにして、其買たる品と共に來(た)りたる売上げ書の写をなすものなり…」と説明している。現代の商品掛買帳に当たる。

現金帳は、「現金の受取高遣拂高及び打金引の出入を認る帳にして、各半面を上下二段とす、上段は受入の金高と自身より人に許し与へたる打金引を付け、下段は遣拂金と他より許し与へられたる打金引を記すなり…」と説明している。現代の現金出納帳に当たる。ただし、説明にもあるように、上段に入金欄、下段に出金欄を設けて、入金と出金の差額を現金有高として下段に記入するのである。

手形帳は、「金子を受取る可き手形と渡す可き手形を認る帳にして、帳の一方は受取る可き方を付け、他の一方へ渡す可き方を認む…」と説明している。すなわち、手形勘定を受取手形と拂方手形に区分し、それぞれ受入及び拂出月日、番号、姓名、金高、月日、期限、期日、現金帳入等を記入するのである。

仕切帳は、「他の諸帳より一勘定毎との括計を、一々<sup>シメククリ</sup>抽出し認むる帳にして、懸賣帳、懸買帳、現金帳及び手形帳の中に認入たるものを悉く一聚し日附の順を以って各人の姓名の下に共人々の勘定を附るなり…」と解説している。この仕切帳は、現在の元帳のことであって、単認の場合は、各帳簿から直接に転記するが、複認の場合は、中仕切帳(=仕訳帳)を経て転記される。

単認の事では、「此の認方に於いては、懸賣、懸買、現金、手形の諸帳より各々の勘定を仕切帳へ各々一遍の勘定に認め入れるなり、故に単認と云う、複認の方にては右各々の勘定を仕切帳に入るゝに、一つの勘定を二通りの勘定にして認むるなり、単認の法は複認の法よりは簡略なれば、小賣にて重もに用ふる法なり」。

単認(=単式)の場合は、諸帳簿の勘定を、仕切帳(元帳)の勘定へ1回だけ転記(posted or entered)するが、複認(=複式)の場合は諸帳簿の勘定を、仕切帳の別々の勘定へ2回転記するのである。そして、単認は複認より簡単なので、小売業に用いられるというのである。

## 2. <sup>ヒトヘトメ</sup>単認之部例題

単認之部初篇下の記簿教則は、単認(Single-Entry=単式)による、簿記の例題が示される。原文のイギリス人名 John Adams, Edinburgh は、日本人名の本町・柴田浅吉におき換えられている。柴田浅吉は、原文と同様に反物商を営む商人で、1月1日から3月31日までの3ヶ月間の取引が記録されている。内容は、ほとんど忠実な翻訳であるが、金額の数字は全部、変更されている。この点は、原文の金額をそのまま用いた福沢諭吉の「帳合之法」と異なる。柴田浅吉の取引は、1月1日、現金5,000円を元(資本金)とし、この5,000円のうちの4,950円を融通銀行へ預け入れることによって開始される。すべての取引は、懸賣帳(Day-Book)、懸買帳(Invoice-Book)、現金帳(Cash-Book)そして手形帳(Bill-Book)に記入される。倉庫帳(Warehouse-

Book) と財本帳 (Stock-Book) には、品物の金額は記入されず数量のみが記入されている。そして、上述の四つの帳簿からすべての取引金額が仕切帳 (Ledger) へ転記される。

仕切帳 (=元帳) の勘定科目は、人名勘定、融通銀行 (Union Bank)、店道具 (Shop Furniture)、貸失高 (Bad Debts)、商向入費 (Trade)、内勘定 (Capital Accounts)、品物 (Goods) 等の勘定である。これに、損益見認表 (Profit and Loss) 及び差引見認表 (Balance Sheet) 等が加わる。仕切帳の決算は、損益見認表 (損益計算書)、内勘定 (資本金勘定) 及び差引見認表 (貸借対照表) の三つの表で遂行される。まず損益見認表の上段に期首資本金に当たる現金資本 (5,000円) と3ヶ月間の利息である利足 (息) (62円50銭) が記入される。それに利益金 (1,424円56銭) が加わる。下段には費用 (450銭) が記入され、さらに期本資本金たる真財本高 (6,037円6銭) が記録される。すなわち期末資本-期首資本-費用=利益の計算方式をとる。

内勘定では、上段に資本金を減少させる内容を持つ現金 (合計400円50銭) と期末資本金たる差引残 (6,037円6銭) が記入され、下段には期首資本金の現金資本 (5,000円) と利足 (息) (62円50銭) 及び利益金 (1,424円56銭) が記録される。これは、期首資本金+利息+利益金-資本減少高=期末資本金の計算方式である。

差引見認表は、上段に負債と資本が、下段に資産が示される。すなわち、負債として借勘定合高 (2,082円17銭) と手形借高 (4,592円22銭) が、資本として真財本高が記録される。そして資産として品物有高、店道具、貸勘定合高、手形貸高、現金銀行入れが記録される。損益見認表の上下貸借差額から算出された利益金が、内勘定の下段へ振替えられ、内勘定の上下貸借差額から算出された真財本高 (=期末資本金) が、差引見認表の上段に振替えられるのである。原文にもある通り、この貸借対照表における上段 (借方) 負債及び資本と下段 (貸方) 資産の形式は、まさにイギリス式簿記の形式をとるものである。

(単認之部の決算締切手続)

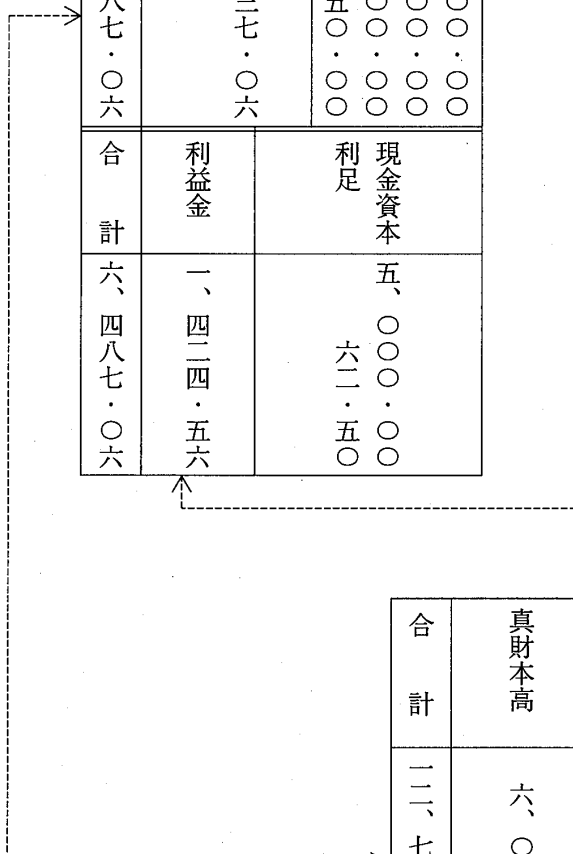
合計	差引残 (真財本高)	同	同	同	現金	合計	利益金	利益金	當日現金資本
六、四八七・〇六	六、〇三七・〇六	五〇・〇〇	二〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	六、四八七・〇六	一、四二四・五六	六二・五〇	五、〇〇〇・〇〇
合計	利益金	利益金	現金資本	利益金	現金資本	合計	自分費用	真財本高	真財本高
六、四八七・〇六	一、四二四・五六	一、四二四・五六	五、〇〇〇・〇〇	六二・五〇	六、〇三七・〇六	六、四八七・〇六	四五〇・〇〇	六、〇三七・〇六	六、〇三七・〇六

内勘定

損益見認表

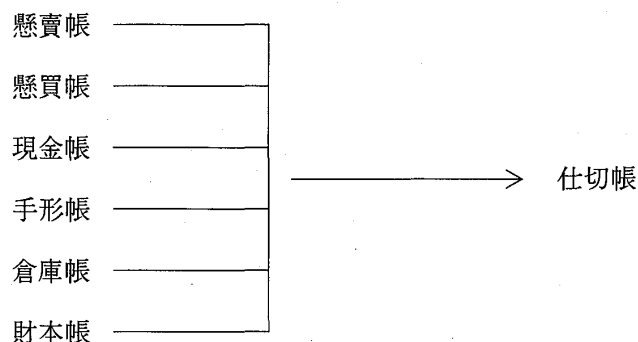
合計	真財本高	手形借高	借勘定合高	品物有高
一一、七一一・四五	六、〇三七・〇六	四、五九二・二二	二、〇八二・一七	一、九六四・六七
合計	手形貸高	貸勘定合高	店道具	現金銀行入れ
一一、七一一・四五	三、〇五〇・四七	三、七八〇・九九	五一〇・六二	三、三一五・〇〇
	現金銀行入れ			同有高
	八九・七〇			

差引見認表

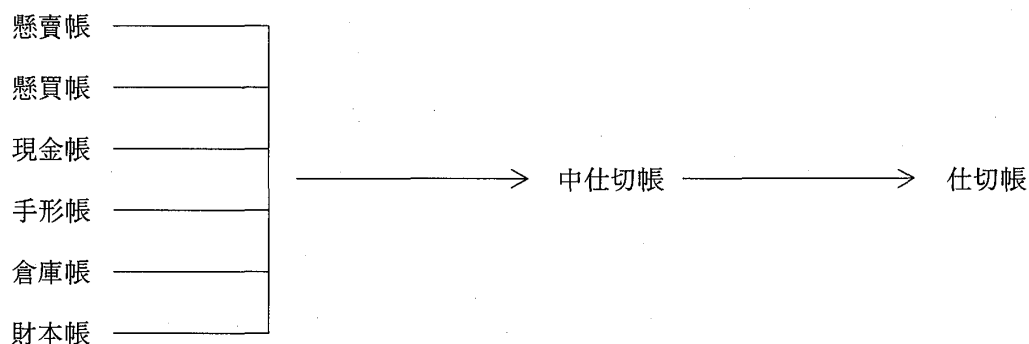




## (商家必用—明治6年の単認による帳簿組織)



## (商家必用—明治10年の複認による帳簿組織)

3. <sup>カサ子トメ</sup>複認之部解説

複認之部の1冊目の記簿教則の二篇上は、複式簿記 (Double Entry) に関する重要事項の解説がなされている。「<sup>カサ子トメ</sup>帳合の複認と名付けたる由縁は、都て懸賣帳、懸買帳、現金帳、手形帳の中の書留を仕切帳の中へ二重に認入れるはなり。初度の認入は、単認と一様に各勘定の借方或は貸方に認入れ而して、再度の認入は別勘定の借方或は貸方に認入る。但初度に仕切帳の借方に認入れしものは、<sup>ニドメ</sup>再度には貸方に認入れ、初度に貸方に認入れしものは、再度に借方に認入る、なり」

簿記 (Book-Keeping) において、複式 (Double Entry) と名付けた理由は、すべての帳簿から仕切帳 (元帳) に、二回認入れ転記 (=are posted) することである。そして最初に仕切帳すなわち元帳の借方 (Dr.) に認入すなわち転記した場合、次は貸方 (Cr.) に転記するのである。

この文章で興味深いことは、Bookkeeping を「帳合」と訳したことである。初篇の出版は明治6年10月であったので、明治6年6月出版の福沢諭吉の『帳合之法』を、加藤は見ることがなかった。しかし、この複認之部の出版は、明治10年4月なので、明治6年と明治7年出版の福沢の『帳合之法』を見たことは確実である。したがって、加藤は Book-Keeping を「帳合」と訳したものと思われる。また、加藤は、Dr.を借方、Cr.を貸方と訳している。この借方と貸方という訳は、明治6年『銀行簿記精法』と同じである。多分、加藤の借方と貸方という訳は、『銀行簿記精法』を参考にしたものと思われる。次に複式簿記に従って記録した場合の組織の有用性について、次



の四つの事項を示している。

第一 仕切帳認入の精粗を調ること、但再度の認入の初度の見合せとなす (To test the accuracy of the posting: the second posting being a check on the first)

第二 年中又は一ヶ月間に賣買したる品物の金高と多寡を見ること (To shew the value and quantity of Goods bought and sold during the year, or for any other given time)

第三 商方の部類に由て損得を見ること (To shew the Profit and Loss on the various departments of the business)

第四 商物その他所有品の類を以て勘定を別々に立ること (To keep distinct accounts, under their several heads, of the different branches of stock in trade, and other property)

次に、上述の四つの事項を少し易しく解説してみる。第一が、懸売帳、懸買帳等諸種の帳簿から仕切帳(元帳)へ転記するが、各帳簿の一つの項目から仕切帳の二つの勘定科目へそれぞれ転記することとなる。この場合、二つの勘定科目の金額が一致していることが必要なのである。第二が、一年間または一ヶ月間に売買した商品の数量と金額を知ることが必要なのである。第三が、商売の各部門における損益を計算する必要があるのである。第四が、商品及びその他の財産等を各勘定科目別に明確に区分することが必要なのである。次に、複認(複式)と中仕切帳(仕訳帳)について解説している。

複認は重に、問屋商ひ(wholesale merchants)の如き大取引をなし、一時に多くの品物を売買するものに用いる方法である。また中仕切帳(Journal)は、複認の場合には必ず用いることを通例とするが、用いないこともできるというのである。

次に懸売帳、懸買帳、現金帳、手形帳から仕切帳(元帳)へ記入(転記)する方法である認法について解説する。例えば、懸売帳の仕切帳への認法(Posting the Day-Book)には、二様(two ways)がある。其一は、初度の認入(転記)であって、懸売帳のすべての書留(項目)を、仕切帳(元帳)の各勘定の借方(Dr.)へ認入(転記)するのである。第二は、月末毎にすべての品物の総合計を、仕切帳の貸方(Cr.)へ認入(転記)するのである。仕切帳差引(Balancing the Ledger)では、仕切帳(元帳)の差引(決算)を解説している。

仕切帳の決算は、年末あるいは何時でも、必要に応じてなされる。そして、次のような三つの項目に類別される。人別勘定(Personal Accounts)と物類勘定(Property Accounts)そして損益勘定(Profit and Loss Accounts)である。人別勘定は各取引先の人名勘定であって、人別勘定の差引借の高は、次の勘定の借方へ、差引貸の高は次の勘定の貸方へ移すのである。物類勘定は、品物、茶、砂糖、現金、手形他等の勘定である。そして品物の差引残は次の勘定の借方に移し、その差引借の高は、損益表の借方或は貸方に移して送るのである。現金及び手形の差引は、人別勘定と同じく、差引貸借の高を次の勘定の借方又は貸方へ移し仕切るのである。

損益勘定は、手数料、利息、危難請合料(保険料=Insurence)、打金(割引料=Discount)、貸失(貸倒損失=Bad Debts)及び商費(営業費=Trade Expenses)等である。そして、損益勘定における手数料、貸失等の各項目の損分を損益表の借方に、益分を貸方に移す。そして損益表の差

引の益分は（利益）は各資本勘定の貸方へ、損分（損失）は借方へ移し、仕切るのである。

假差引とは、試算表（Trial Balance）のことである。損益表（損益計算書＝Profit and Loss）は、1年或は若干時月の取引に於ける損益を確認する表である。借方（Dr.）には、貸失、商費等の損分を記入し、貸方（Cr.）には、品物、砂糖、紙、手数料等の利得の如き益分を記入するのである。

差引表（貸借対照表＝Balance Sheet）は、年末或いは商業の様態を調べんと欲する時（when you wish to ascertain the state of your affairs）に作成するのである。借方には、諸借債（Your Liabilities）を、貸方には諸貸高（Your Assets）及び所有物の高を記入するのである。そして借方と貸方の両方の差は、真正の資本（your property or capital）となるのである。

#### 4. <sup>カサ子トメ</sup>複認之部例題

複認之部の2冊目の記簿教則の二篇下は、複式簿記（Double Entry）の例題が作成されている。原文のHamilton & Boyd, Londonは、銭屋半助と六角栄藏におき換えられている。銭屋と六角は、原文と同様に、共同で主して反物商の商社を経営し、1月1日から3月31日までの3ヶ月間の取引が示されている。

すべての諸取引は、単認と同様に、まず懸売帳、懸買帳、現金帳、手形帳、倉庫帳等に記入される。そして、単認と異なることは、これらの諸帳簿に記入された諸項目が、中仕切帳（仕譯帳又は區別帳）に、分類して移記される。中仕切帳は、通常は複認に用いられるものであるが、省くこともできると解説している。加藤は、「中仕切帳の主意は、月々懸売、懸買、現金、手形の諸帳より類を以て抜萃し、其金高を、<sup>デミチカ</sup>単一にメ切帳に認入るゝに在り」と記述している。

中仕切帳の項目は、すべて仕切帳へ転記される。仕切帳（Ledger＝元帳）には、人名勘定、融通銀行（Union Bank）勘定、受手形（Bills Receivable＝受取手形）勘定、拂手形（Bills Payable＝支払手形）勘定、品物－買方（Goods－General Account＝仕入）勘定、品物－売方（Goods on Commission）勘定、取次品（原文にない）勘定、紙（Paper）葡萄酒（Wine）、砂糖（Sugar）、茶（Tea）、茄菲（Coffee）等の商品名勘定、帳場道具（Furniture）勘定、現金（Cash）勘定、打金（Discounts）勘定、利息（Interest）勘定、危難請負（Insurance＝保険）勘定、手数料（Commission）勘定、貸失（Bad Debts＝貸倒）勘定、商費（Trade Expense＝営業費）勘定等が示されている。人名勘定については、すべてのイギリス人名が日本人名におき換えられている。例えば、James Arnold, Londonは、浪華銭屋淺藏に、John Turner, 10Charlotte Streetは筑前城他助に書き換えられているのである。

仕切帳（元帳）における期末決算は、假差引帳（試算表＝Trial Balance）、損益表（損益計算書＝Profit and Loss）、銭屋半助資本勘定（James Hamilton. Capital Account）と六角栄藏資本勘定（Robert Boyd. Capital Account）、銭屋六角差引表（貸借対照表＝Balance Sheet. Hamilton & Boyd）等で遂行される。

決算手続では、まず損益表に損益項目が集められる。上段の損失欄には、打金、損失、商費等

(複認之部の決算締切手続)

六角栄藏資本勘定				銭屋半助資本勘定				損益表							
現金	同	同	差引	現金	同	同	差引	打金	貸失	商費	六栄	銭半	合計		
一五〇・〇〇	一五〇・〇〇	一七五・〇〇	一一、四一九・〇六五	一五〇・〇〇	一五〇・〇〇	一七五・〇〇	一一、四一九・〇六五	三八四・〇一	六一〇・九〇	一、〇三八・四九	三、七八八・一三		五、八二一・五三		
現金	利息	利分半高	合計	現金	利息	利分半高	合計	品物在高	取次品	紙	葡萄酒	茄菲	利息	手数料	合計
一〇、〇〇〇・〇〇	一一五・〇〇	一、七六九・〇六五	一一、八九四・〇六五	一、〇〇〇・〇〇	一二五・〇〇	一、七六九・〇六五	一一、八九四・〇六五	一、六一六・九四	九四・八一	一、二六〇・〇二	一八七・三八	一、九九〇・四五	一八二・八〇	四八九・一三	五、八二一・五三

合計	四〇、二五二・九〇	合計	四〇、二五二・九〇
拂手形	五、六六七・一〇	品物在高	九、二九〇・六〇
借勘定合計	一一、五九七・六七	葡萄酒	六八〇・〇〇
打金	一五〇・〇〇	茄菲	一、一五八・四〇
銭半資本		帳場道具	五九三・七五
六栄資本	二二、八三八・一三	貸勘定合計	一二、六二九・五三
		受手形	四、七〇一・四五
		融通銀行	一〇、九〇二・五〇
		現金在高	二九九・六七

銭屋・六角 差引表

## (原著・複式簿記の部の決算締切手続)

## 損益計算書 (=損益表)

損失	割引	63	8	6	利益	商品	302	12	0
	貸倒	117	18	6	〃	委託商品	18	19	9
	営業費	207	13	11	〃	紙	256	3	0
					〃	ポート・ワイン	35	9	6
ハミルトン	利息	25	0	0	〃	コーヒー	389	12	4
	利益	348	7	6	〃	利息	36	11	2
	利息	25	0	0	〃	手数料	96	7	4
ボイド	利益	348	7	6					
		746	15	0					
		1135	15	11			1135	15	11

## ジェームス・ハミルトン 資本金勘定 (=錢屋半助資本勘定)

現金	30	0	0	現金	2000	0	0
同	30	0	0	利息	25	0	0
同	35	0	0	利益 2分の1の取り分	348	7	6
残高	2278	7	6				
	2373	7	6	残高	2278	7	6

## ロバート・ボイド資本金勘定 (=六角栄蔵 資本勘定)

現金	25	0	0	現金	2000	0	0
同	15	0	0	利息	25	0	0
同	40	0	0	利益 2分の1の取り分	348	7	6
同	15	0	0				
残高	2278	7	6	残高	2278	7	6
	2373	7	6				

## 貸借対照表 (=差引表)

支払手形	1132	15	9	商品	1832	8	6
ハミルトン・ボイドによる会計	2291	8	2	ポート・ワイン	136	0	0
				コーヒー	235	1	8
割引	30	0	0	カウンティング・ハウス備品	118	15	0
	3454	3	11	ハミルトン・ボイドへの勘定	2322	5	2
ハミルトンの純資本2278.7.6.				受取手形	2530	2	11
ボイドの純資本 2278.7.6.	4556	15	0	ユニオン銀行	926	8	10
				現金	2180	10	0
	8010	18	11		51	12	0
					8010	18	11

(商家必用)

	三月	一月	年	帳 場 道 具
	三二日	一日		
	差引………	現金 此ハ帳場道具ヲ買 入レタル高ナリ		
		一		
	五九三	六二五	六二五	
	七五	〇〇	〇〇	
		三月	年	
		同	三二日	
	夫々ノ名称ヲ以テ別目ヲ立テス…	此類ノ勘定ハ其金高一恒産ト 做ス程ノ額ニ非スメ僅少ナレハ	元価百分五ノ減価 商費ニ入ル	
		二八	三一	
		六二五	五九三	
		〇〇	七五	
			二五	

(原著)

カウンティング・ハウス備品 (=帳場道具)

現金 これは備品のため支払われた 金額である。	125	0	0	減価償却5%、営業費に振替 える	6	5	0
残 高	125	0	0	残 高	118	15	0
	118	15	0		125	0	0

の損失項目と金額が記入される。下段の利益欄には、品物在高、取次品、紙、葡萄酒、茄菲、利息、手数料等の利益項目と金額が記入される。そして下段の利益合計額から下段の損失合計額を差引いた金額3,788円13銭を純利益として銭屋と六角の資本勘定へ、それぞれ半分ずつ振替える。この場合、損益表で算出される利益は、3,788円13銭であるが、この利益金を銭屋と六角の二人に二分し、1,899円6銭5厘とする。さらにこの金額（1,899円6銭5厘）を、それぞれ二人が出資した資本金10,000円に対する利息125円と残りの1,769円6銭5厘に区分する。

そして、この125円と1,769円6銭5厘という二つの合計金額が、銭屋半助と六角栄蔵の二つの資本勘定の下段（貸方）に利益として振替えられる。さらに二つの資本勘定の下段の増加額から上段の減少額の差額11,419円6銭5厘の二人の合計額22,838円13銭を期末資本金として算出する。そしてこの資本金を銭屋・六角の差引帳の上段に振替えられる。

そしてすべての資産、負債及び資本勘定の残高が銭屋・六角差引表に集められる。すなわち、上段の負債、資本勘定欄には、拂手形、打金、銭半資本の半高と六栄資本の半高の合計額が示されている。さらに、下段の資産勘定欄には、品物在高、葡萄酒、茄菲、帳場道具、貸勘定合計、受手形、融通銀行、現金在高勘定の残高が示されている。そして上下両段・貸借の合計金額40,252円90銭という金額の一致をもって決算が完了するのである。

帳場道具（Counting-House）勘定には、減価償却（Depreciation）の計算が見られる。すなわち、現金払で買い入れた625円の帳場道具も数ヶ月で百分の5（31円25銭）の価値の減少が見られたので、差引593円75銭となるのである。なお31円25銭の価値の減少は商費に計上される。

#### IV 福沢諭吉『帳合之法』との比較

福沢諭吉の『帳合之法』は、単式簿記が明治6年（1873年）6月に、複式簿記が明治7年（1874年）6月に出版されている<sup>1)</sup>。

加藤 斌の『商家必用』は、単式簿記が明治6年10月に、複式簿記が明治10年（1877年）4月に出版されている。単式簿記について、加藤は福沢よりわずか4ヶ月の遅れで出版している。したがって、加藤が福沢の翻訳を参照したということはあり得ないことである。ただし、複式簿記については、加藤は福沢の約3年後に出版している。したがって、複式簿記に関しては、加藤が福沢の翻訳を参照したという考えはあり得ることである。事実、前述したように加藤は複式の部で、Bookkeeping を「帳合」と訳している箇所が見られるのである。

福沢の『帳合之法』も加藤の『商家必用』も、共に英語からの翻訳である。しかし、『帳合之法』の原典、“Bryant & Stratton’s Common School Bookkeeping, 1871”は、アメリカの簿記書であり、『商家必用』の原典、“Inglis Book-Keeping by Single and Double, 1872”はイギリスの簿記書である。したがって、その内容においては、後で詳述するように多くの相違点が見られる。

『帳合之法』が、パチョーリに基礎を置く、純粋なイタリア式簿記法を解説したのに対し、『商

家必用』はドイツ、フランス及びイギリスを中心に考えられた複雑な簿記法を解説したものである。二つの簿記書は単なる簿記の翻訳書ではない。二人が翻訳した日本語は、単なる直訳ではなく、英文の内容を十分に咀嚼し、それを日本の習慣と風土と合わせた極めて解りやすい名訳となっている。福沢は原典の金額と同じ数字を使って、日本の単位に当て嵌めたのに対し、加藤はすべての金額の数字を日本の単位に合わせるために、変更したのである。福沢は、『帳合之法』を出版する目的について明確に論述している。第一は近代文明を目指す企業家精神の向上であり、第二は実学としての西洋簿記の日本語による解説であった。加藤は出版の目的については、その理由を明らかにしていない。しかし、加藤の封建制の打破と西欧的近代文明の向上を目指した行動から考察して、福沢と同様の目的を持っていたことは十分推測できる。次に、福沢と加藤の簿記用語上の英語から日本語への翻訳の比較を示しておく。

	(福沢諭吉)	(加藤 斌)
Book-keeping	帳 合	商家必用 (帳面記方)
Single entry	畧式 (単記)	單 認
Double entry	本式 (複記)	複 認
Debit	借	借 方
Credit	貸	貸 方
Transaction	取 引	取 引
Business	商 売	
Account	勘 定	勘 定
Capital	元 金	資 本
Interest	利 息	利 息
Investment	元 入	
Day book	日 記 帳	懸 賣 帳
Ledger	大 帳	仕 切 帳
Cash Book	金銀出入帳	現 金 帳
Journal	清 算 帳	中仕切帳
Inventory	仕 入 帳	
Invoice	送 状	懸 買
Bill Book	手 形 帳	手 形 帳
Bill	手 形	手 形
Merchandise	商 賣 品	
Balance	平均又は残高	差 引
Trial Balance	平 均 改	假差引表
Resources	元手又は手当	

Liabilities	佛口又は引負	
Gains	利 益	
Losses	損 亡	
Equilibrium	平等付合	
Balance Sheet	平 均 表	差引表 (差引見認表)
Exchange	為替又は両替	
Stock	元 入	財 本
Warehouse		倉 庫
Posting	写 し	認 入
Profit and Loss (Loss and Gain)	損 益	損 益 表
Discount		打 金
Bad Debts		貸 失
Trade Expense		商 費
Insurance		危難請負
Commission		手 数 料
Counting-House		帳場道具
Goods		品 物
Union Bank		融通銀行
Closing Entries		収 束

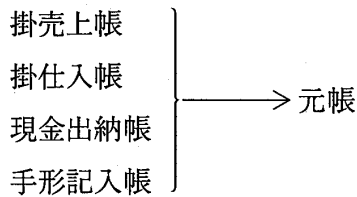
- 1) 福沢諭吉の『帳合之法』については、拙稿「福沢諭吉『帳合之法』に関する一考案」『経営論集』第8号(2004年9月)大東文化大学経営学会, 15-30頁を参照されたい。

## V 原典の簿記法

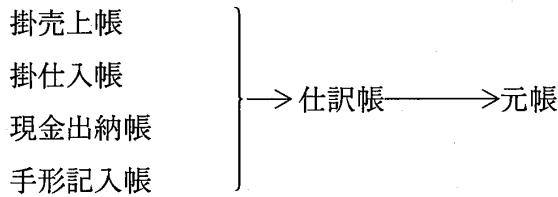
加藤が翻訳したイングリシ (Inglis) の原典 “Book-keeping by Single and Duple” は、ロンドンとエジンバラで出版された純然たるイギリスの簿記書である。したがって、この簿記書の中で解説された簿記組織はイギリス式簿記かということと必ずしもそうとは言えない。帳簿組織の観点から言えば、いくつかの問題点がある。まず、イングリシが解説した帳簿組織を現代的に整理して訳すならば、次のようになる。



〔単式簿記の場合〕

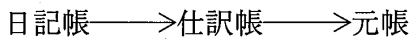


〔複式簿記の場合〕



この帳簿組織の特徴は、日記帳に当たる帳簿に、多種の帳簿を使用したもので、単式簿記と複式簿記の相違点は、仕訳帳を使うか否かのみにある。同時期に福沢諭吉が、翻訳した『帳合之法』の原典 “Bryant & Stratton’s Common School Bookkeeping” は、アメリカの簿記書であるが、日記帳、仕訳帳、元帳の三帳簿制を中心とするイタリア式簿記、正確にはパチョーリの簿記組織に基礎を置くものである。

(帳合之法)



また明治6年に出版された、イギリス人アレキサンダー・アラン・シャンド (Alexander Allan Shand) の『銀行簿記精法』<sup>1)</sup>に説かれた簿記法は、伝票、日記帳、総勘定元帳を中心とするものである。

(銀行簿記精法)

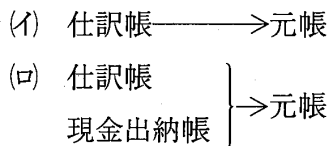


もともとイギリスでは、16世紀初頭にパチョーリの簿記組織が導入され、それが17世紀及び18世紀と引き継がれているのである。

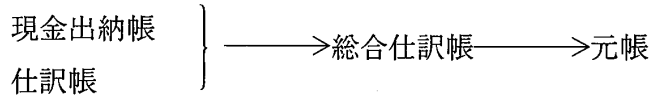
例えば、16世紀から17世紀初頭にかけては、ピール (Peele, James, 1553年), ウェディングトン (Wedington, John, 1567年), メリス (Mellis, John, 1588年), ペトリ (Petri, Nicolaus, 1596年) そしてカーペンター (Carpenter, John, 1632年) 等は、仕訳帳と元帳を主要簿とする二帳簿制を採用している。そして、17世紀、18世紀及び19世紀にかけては、ダフォルネ (Dafforne, Richard, 1635

年), コリンソン (Colinson, Robert, 1683年), マクギイ (Macghie, Alexander, 1718年), ノース (North, Roger, 1714年), ホウキンス (Hawkins, John, 1704年), マルコム (Malcolm, Alexander, 1731年), ステフェンス (Stephens, Hustcraft, 1735年), ハミルトン (Hamilton, William, 1735年), メイヤー (Mair, John, 1736年), ドッドソン (Dodson, James, 1750年), ステイーヴェンソン (Stevenson, William, 1762年), セジャー (Sedger, John, 1779年), ハミルトン (Hamilton, Robert, 1788年), シアウ (Shaw, John, 1794年), ケリー (Kelly, Patrick, 1801年), コリイ (Cory, Preston, 1839年)等は, 日記帳, 仕訳帳そして元帳を主要簿とする三帳簿制を採用しているのである。総じて, イギリスでは, 簿記書に関してのみ言えば, 16世紀から19世紀にかけては, イタリア式簿記組織が, 支配的であったと主張できる。例外的には, ブース (Booth, Benjamin, 1789年) のように, 現金帳, 手形帳, 仕入帳, 売上帳, 送り状帳, 債務帳等のような分類された仕訳帳から元帳へ転記する方式を採用した簿記法もあった。かつて, 故上野道輔教授は, 簿記形式を Hügli の説に依拠し(1)イタリア式簿記, (2)ドイツ式簿記, (3)フランス式簿記, (4)イギリス式簿記に分類した<sup>2)</sup>。その分類形態は, 次の通りである。

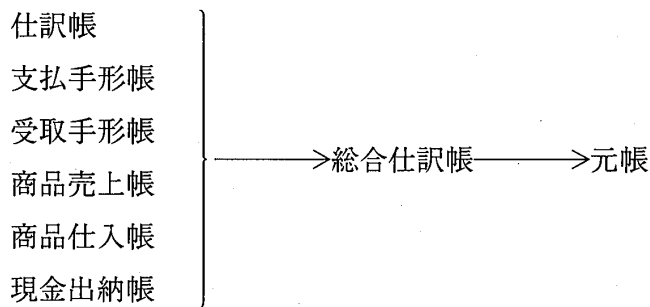
## (1) イタリア式簿記



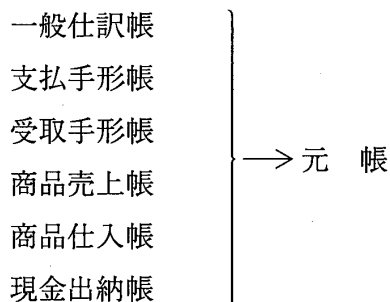
## (2) ドイツ式簿記



## (3) フランス式簿記

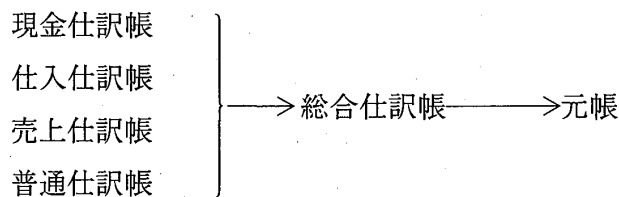


## (4) イギリス式簿記



上野教授は、イギリス式簿記 (die englische Buchhaltung) とは、4種以上多数の特殊仕訳帳と元帳よりなる帳簿組織を有し各種の特殊仕訳帳より直接に元帳へ転記を行い、個別転記と総合転記を併せ用うる簿記形式であると説明している。そして、この簿記形式はフランス式簿記が、一般の発達を遂げたものであろうと推論している。また、故黒沢清教授は、四つの仕訳帳、総合仕訳帳そして元帳からなる簿記組織を示し、これをドイツ・フランス式簿記法 (Die deutsch-Französische Buchhaltung) と呼んでいる<sup>3)</sup>。この簿記形態にあつては、日記帳の機能が四分され、現金出納に関する事項は現金仕訳帳に商品仕入に関する取引は仕入仕訳帳に、商品売上に関する取引は売上仕訳帳に、残りの取引は普通仕訳帳に記入されるのである。

(ドイツ・フランス式簿記法)



以上論述した観点から見れば、イングリシが解説し、加藤が翻訳した簿記法は、決して伝統的なイギリス式簿記法ではなかった。しかし19世紀以後、ドイツ・フランスそしてイギリスを中心に考えられた簿記法とすることができるのである。

- 
- 1) アラン・シャンドの『銀行簿記精法』については、黒沢清『日本会計制度発展史』財経詳報社、平成2年10月、3-68頁に詳しく解説がなされている。
  - 2) 上野道輔『新稿 簿記原理』有斐閣、第14版、昭和11年4月、483-486頁。
  - 3) 黒沢清『簿記原理』東洋出版社、昭和9年1月、338頁。

## VI あとがき

加藤 斌の『商家必用』は、イギリス簿記書からの翻訳である。全五巻のうち、最初の二巻は単式簿記の解説であり、後の二巻は複式簿記の解説である。そして最後の一巻は、商業上の用語と取引に関する解説である。

現在の会計の観点からすれば、この簿記書の技術は必ずしも高い水準にあるものではない。むしろ、低い水準にあると言えよう。しかし、当時の江戸時代から引継がれた簿記法と比較すれば、このヨーロッパ式簿記法はかなり新しく、高い水準を行くものであった。しかも、英書からの単なる直訳書ではなく、日本の風土と習慣に合わせた、解りやすい日本語の翻訳となっているのである。同時代に出版された福沢諭吉の『帳合之法』と比較しても、その翻訳上の日本語の能力は、

決して見劣りのない内容を持つすばらしい翻訳書である。ただ、『帳合之法』がアメリカ簿記書の翻訳本であり、『商家必用』がイギリス簿記書の翻訳本であるので簿記上の内容において多くの相違点がある。すなわち、『帳合之法』が日記帳、仕記帳及び元帳（正式には日記帳、清書帳及び大帳）を中心とするイタリア式簿記法であったので、理解し易かったのに対し、『商家必用』が、(イギリス、フランスそしてドイツ式の) 多数の帳簿を使用する複雑な帳簿組織に基づいていたので、一見理解し難く、採用しにくい点があったように思われる。

しかも、加藤 斌が知名度において有名な福沢諭吉よりも劣るという点があったので、加藤 斌の『商家必用』は、『帳合之法』と比較すると若干有名さに欠けたように思われる。

しかし、加藤の行動力は決して福沢のそれに劣るものではなかった。加藤は、若き日、安政の大獄で処刑された橋本左内から弟子として、多くの薫陶を受け、共に行動したことがあった。その精神は、封建制への反抗と近代文明への開化にあった。師、橋本左内の処刑は、その後の加藤の精神に大きな重荷を負わせたことは、想像にかたくない。それは、明治維新以後の加藤の行動を見れば明らかである。明治の始まりとともに、加藤は近代文明の向上と西欧文化の吸収に努めるのである。英語力の習得もその一つであった。そして日本商業発展と富国強化の目的の一環として、イギリス簿記書を翻訳・公刊したことは十分理解できるところである。

まさに、明治6年以後、日本へのヨーロッパ式複式簿記導入という記念すべき業績は、『帳合之法』及び『銀行簿記精法』と並んで、加藤 斌の『商業必用』によって遂行されたのである。